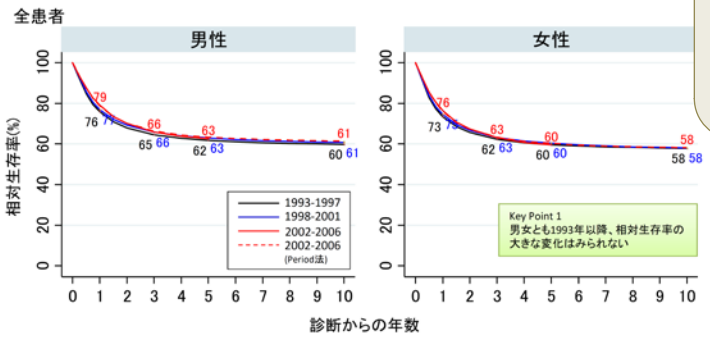
部位別分析結果のみかた

大阪府立成人病センター　がん予防情報センター　伊藤ゆり

本冊子の 17 ページからは各部位ごとの分析結果およびその解釈の文章となっている。関心の部位のページだけを取り出して読んでも理解できるよう説明を心がけたが、より理解を深めるためにも、分析結果のみかたについて胃がんの結果を例に概説する。なお、部位によっては、進行度が存在しないもの、また症例数が少なすぎて、結果が不安定なものは結果を示していない。

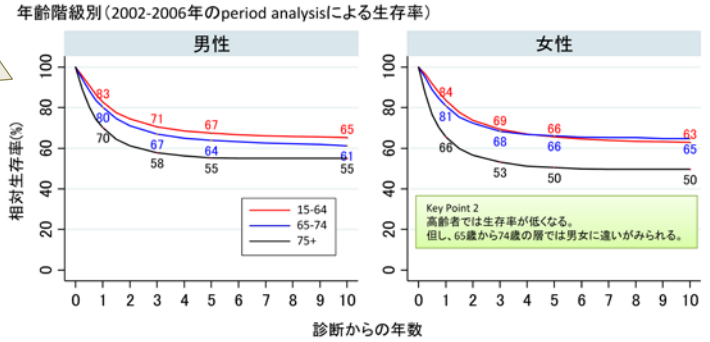
10 年相対生存率

黒→青→赤（実線）→赤（点線）の順に高くなっていれば、生存率が近年になるにつれ向上している

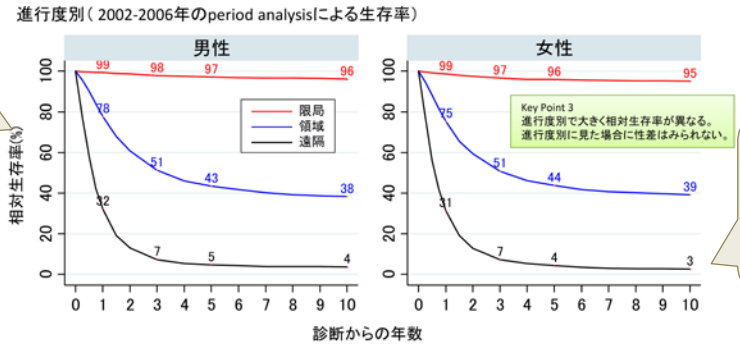


最新の 10 年相対生存率（period 法）が年齢階級別に示されている

グラフの見どころが **Key point** として示されている。最終のページに各 Key point に関する解釈の文章が掲載されている。



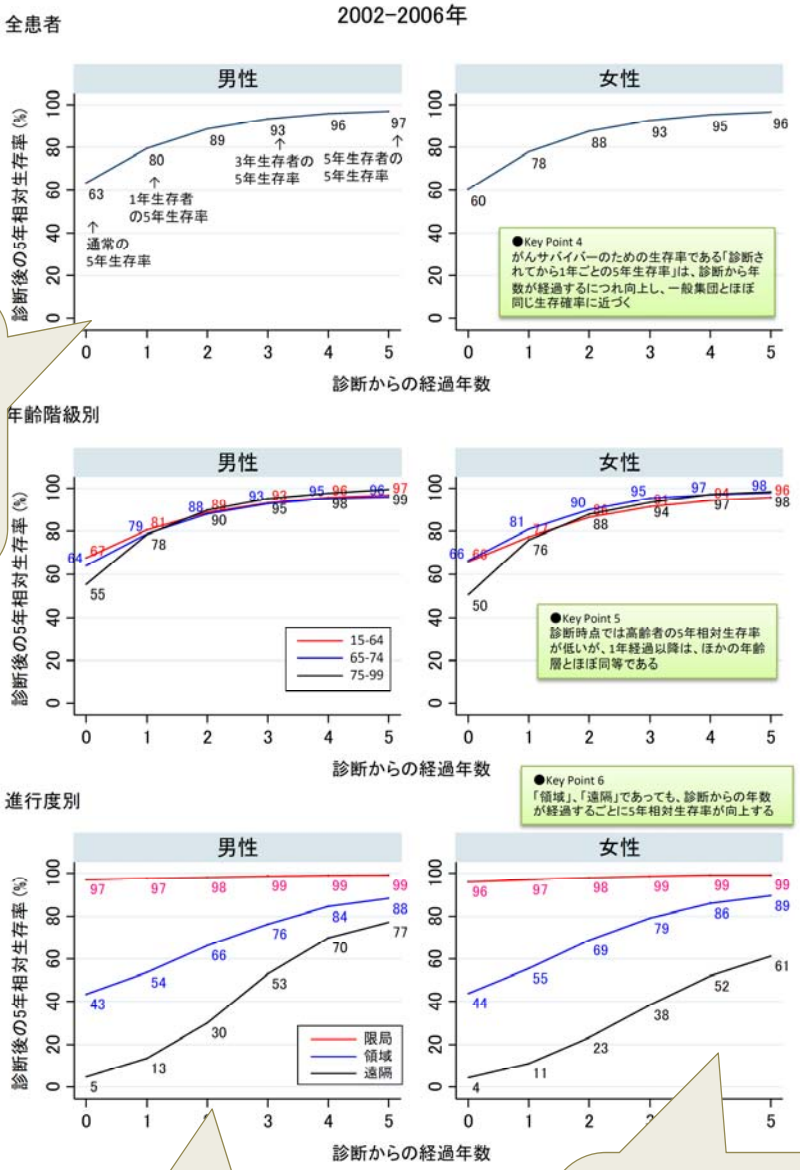
最新の 10 年相対生存率（period 法）が進行度別に示されている



グラフ中の数値はそれぞれ 1 年・3 年・5 年・10 年生存率

サバイバー5 年相対生存率

通常の生存率と異なり、診断からの経過年数ごとの生存者に限ったその後の 5 年相対生存率（Conditional five-year survival）を「サバイバー5 年相対生存率」と定義した。胃がんの場合、診断から年数が経過するとその時点で生存しているもののその後の 5 年相対生存率（サバイバー5 年相対生存率）は次第に高くなっている。



サバイバー5 年相対生存率は診断からの経過年数ごとの生存者における 5 年相対生存率を示している。

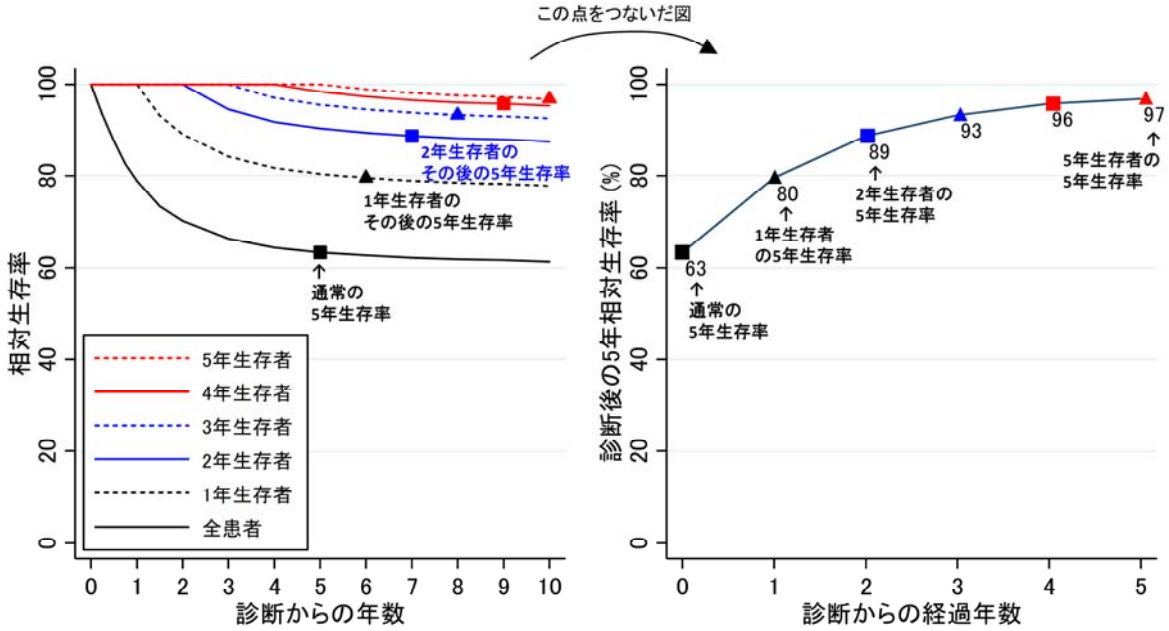
胃がんなどでは、診断からの年数が経過するにつれ、サバイバー5 年生存率はだんだん 100%に近づくが、部位によっては、診断から年数が経過しても一定の割合で死亡が起こる場合、低い値のまま推移するものもある（肝がんなど）。補足 1 を参照。

当然、診断からの年数が経過するほど生存者は少なくなるため、計算対象となる人数は少ないことに注意。予後の悪い部位や遠隔転移では特に顕著なので、表 3 の信頼区間を確認する必要がある。補足 2 を参照。

補足１：サバイバー5 年相対生存率と通常の生存曲線との関係

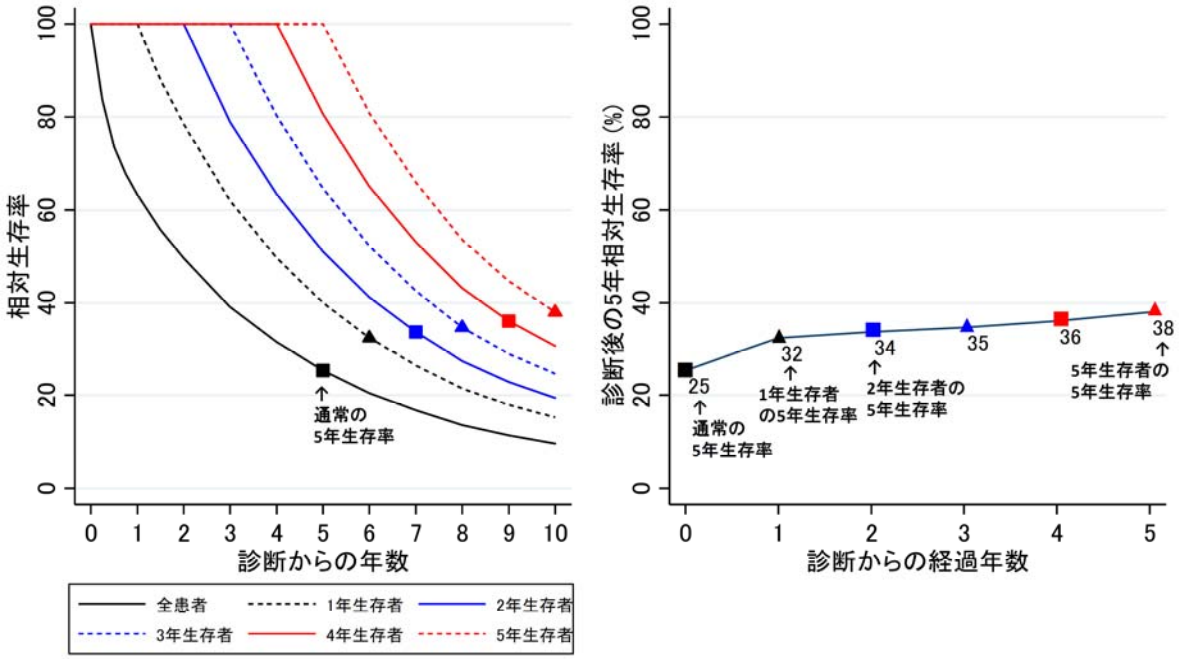
サバイバー5 年相対生存率（診断からの経過年数ごとの 5 年相対生存率、Conditional Survival）はわかりにくいイメージであるため、通常の相対生存率における生存曲線との関連を以下の典型的な 3 パターンで示す。

パターン１: 診断から 1～2 年以内に高い割合で死亡し、その後の死亡確率が低い部位（例：胃がん男性）



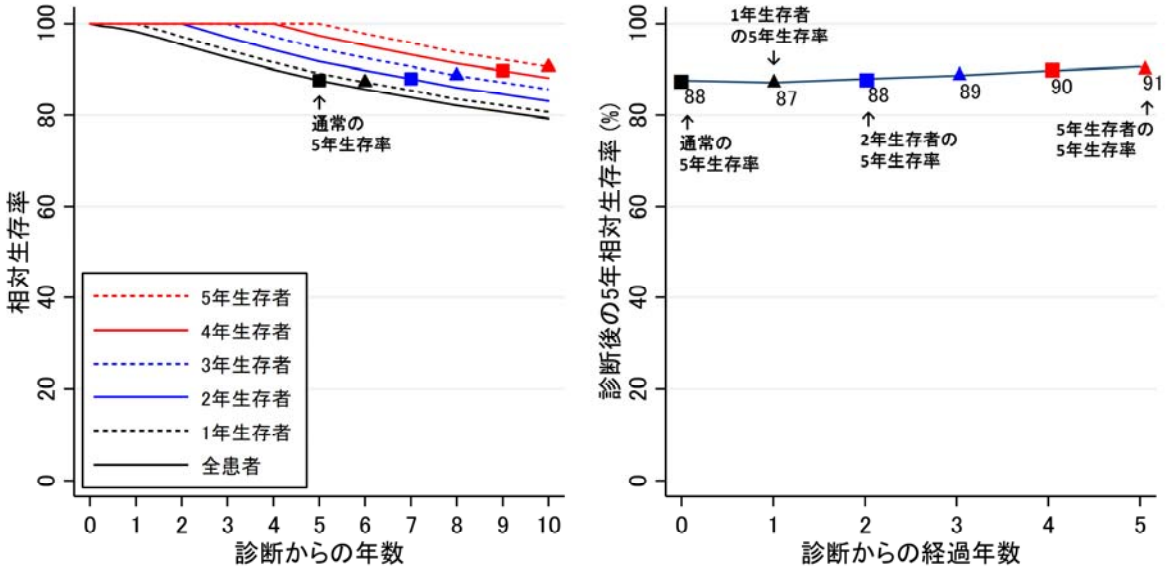
胃がんの場合、診断後 1～2 年以内に死亡する人が多く、その後の死亡は少ないため、サバイバー5 年相対生存率は次第に 100%に近づいていく。

パターン２：診断から年数が経過しても死亡確率が高い部位（例：肝がん男性）



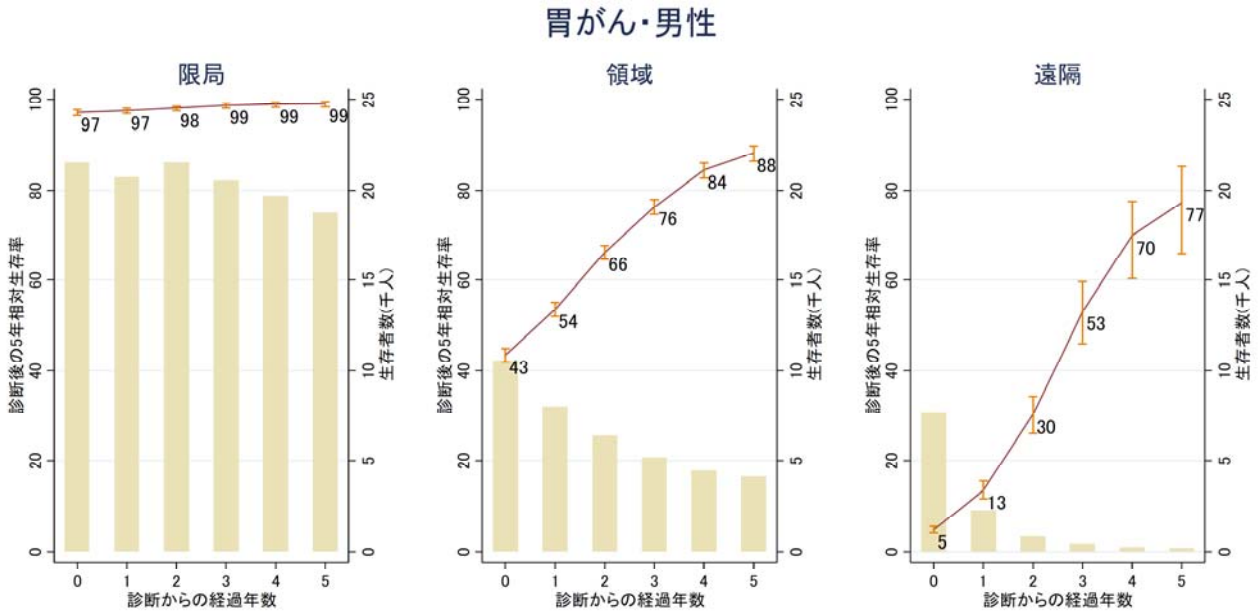
胃がんと異なり、肝がんでは診断から年数が経過しても、再発が多く死亡確率は高いままであるため、サバイバー5 年相対生存率は低いままである。

パターン 3：生存率が高く、診断から年数が経過してもほぼ一定の死亡確率で推移する部位（例：乳がん女性）

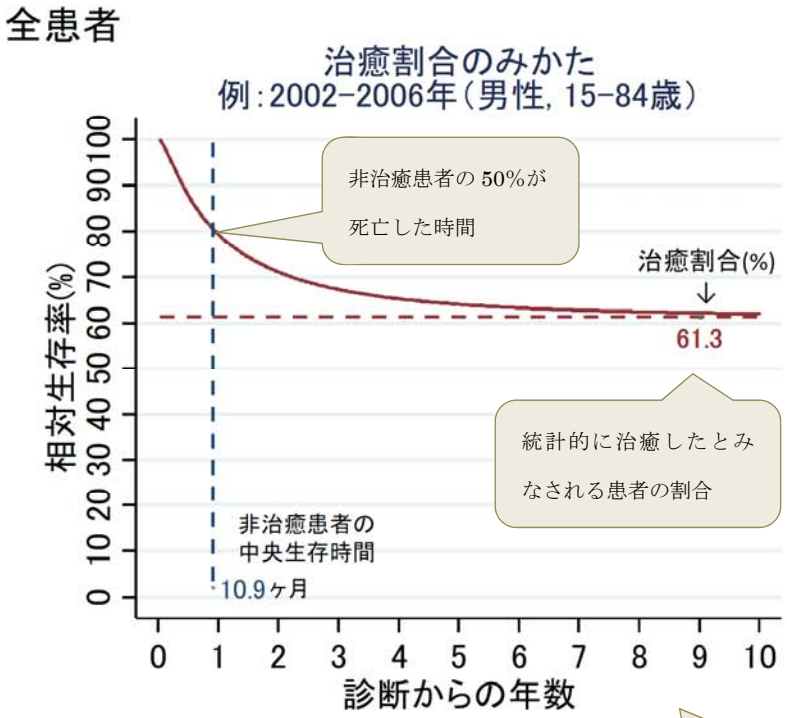


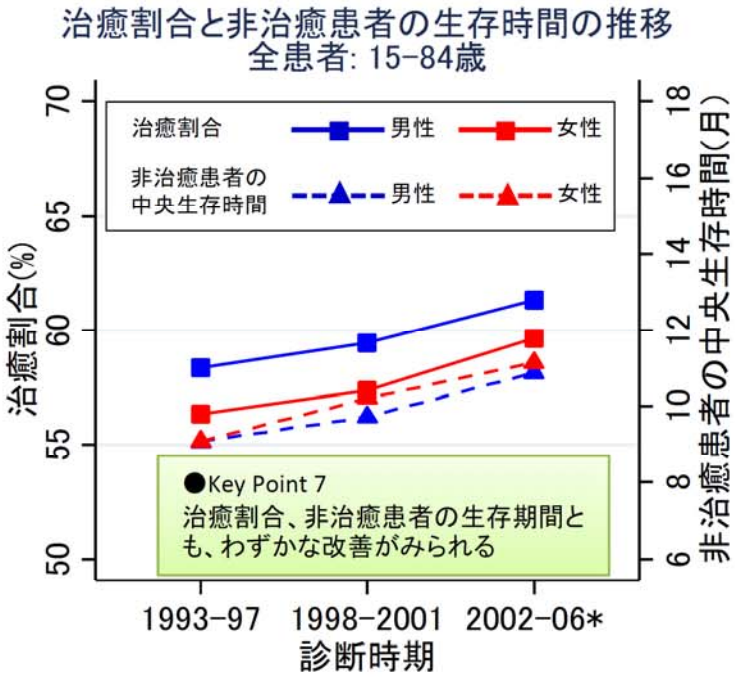
乳がんは予後がよく、もともと生存率が高いが、診断から年数が経過してもある一定の割合で死亡し続ける（再発の影響）。

補足 2：予後の悪い部位や遠隔転移でも、診断から年数が経過するとその後の 5 年相対生存率は高くなる。しかし、その際の対象人数は少なくなるため、信頼区間を確認する必要がある（信頼区間は各部位の表 3 に示されている）。



治癒割合





診断時期ごとに性別・年齢階級別・進行度別に治癒モデルにあてはめ。この「治癒割合」と「非治癒患者の中央生存時間」を推定し、診断時期による変化をグラフ化した